公益社団法人 全国大学体育連合主催

第 2 回 するみるささえるスポーツ教育研究会 抄録

開催日： 2017 年 12 月 3 日(日) 13 時半～16 時半（受付開始 13 時）

会 場： 名古屋企業福祉会館　第 10 会議室（ 〒460-0011 愛知県名古屋市 中区大須２丁目 19-36）

大学体育におけるスポーツを見る教育の意義と可能性

小林 勝法（文教大学）

スポーツを「する」だけでなく、「観る」「支える」態度を養うことは、豊かなスポーツライフを形成させる上で必要である。大学スポーツ振興においても観客を増やすことが課題となっており、教養体育の授業もその課題解決に寄与できる。全国大学体育連合が 2016 年に実施した「大学生のスポーツ経験と意識に関する調査」(5,861 人回答）では「する」「観る」「支える」経験や意識も調査した。その結果をもとに、教養体育の可能性について議論したい。

通信教育における体育実技の事例-みて学ぶことが主体の教育-

高橋憲司（愛知学泉大学）

通信教育における体育授業の現場経験から、当該学生の学習行動について、学生の学習記録をもとに紹介する。通信教育の体育授業では最終確認のスクーリングが義務づけられているが、それまでに動画にて基本技術を学び、各自で実践しなくてはならない。そのため、学生にはスポーツを見て学ぶことが要求される。学習の過程で、学生が当該スポーツを自主的に見学・レッスンを受けるという行動に繋がったケースについても紹介する。

障がい者スポーツの学習から大学体育・スポーツと支えるスポーツを考える

小林培男（日本福祉大学名誉教授）

明治期からの日本の「ささえるスポーツ」は、倶楽部や競技団体および行政などその裏方として存在していたと言うものの、①するスポーツに始まり、②みるスポーツへの広がりが中心であった。大学における体育・スポーツもこのする①のするスポーツが教育の主体となり、近年まで続いた。しかし日本の大学教育は 1991 年の大学教育大綱化によって大学における教育科目の制約が解除され、体育スポーツ科目の開設が必修から除外され、大学による独自のカリキュラム計画にまかされた。この大学大綱化を契機に大学体育・スポーツの内容と価値が再検討され、実践され始め、③ささえるスポーツの新たなスポーツの実践の広がりとなってきている。本稿では、このような大学教育の中にあって、社会的な背景と本学大学における子どものスポーツ、障がい者スポーツおよび高齢者スポーツに主眼を置いた「ささえるスポーツ」の実践から新しい時代のスポーツの価値の広がりと大学体育・スポーツの課題を考える。

大学体育を通したスポーツの文化的享受の可能性

大隅節子（三重大学）

ここでは、大学体育の存在意義について「スポーツの文化的素養の習得」の観点から話題提供を行う。大学体育の授業において、学生は何を習得しているのか？生涯にわってスポーツに親しむ素養は身についているのだろうか？当日は、学生へのアンケート調査の結果を基に、大学体育と学生の「する」「みる」「ささえる」スポーツへのかかわりについて生涯スポーツの観点から検討していきたい。